

2) 武田 知己 氏

たけだ ともき 大東文化大学法学部講師

テーマ：「戦後政治史研究の視点について

—石川真澄著『戦後政治史新版』・北岡伸一著『自民党』を素材として—

月 日：2005年9月15日

出席者：伊藤 隆、有馬 学、武田知己、所澤 潤、長谷百合子、鈴木多聞、
矢野信幸、村井哲也、丹羽清隆、小宮一夫、宮杉浩泰、黒澤 良、
伊藤光一、服部龍二、今井貞夫、高橋初恵

伊藤 前回、武田さんの報告を伺おうと言ったときは、まだ選挙などという話は全くないときでした。その後、[2005年9月11日に]選挙があり、自民党の大勝[衆議院480議席中296議席獲得]という歴史的な事件がありました。[武田さんが]取り上げたのは自民党ですから、非常にびっくりしています。偶然ではありますが、僕は今日、武田君が、今度の自民党の大勝を過去の延長線上でいったいどう位置づけるのかということをお話しくさるのではないか、その大変な好機だ、と思っております。同じことをいろいろな人に伺っているんですが、今度の自民党の勝利を過去と関連づけてうまく説明してくれた人は誰もいません。これをもし武田君ができたなら、どこかに売り込もうかと思っているわけです。まあ、あまり脅かしませんので、ゆったりした気持ちでやってください(笑い)。では、お願いいたします。

武田 それでは、報告を始めさせていただきます。いま伊藤先生がおっしゃったように、自民党が選挙で勝ったことは、話の内容にも少し影響があります。北岡伸一先生も『自民党—政権党の38年』(読売新聞社、1995年)で、これからは選挙が重要になっていく、いままでの自民党の党運営のあり方、派閥政治だけで通用するような時代は終わったのだ、と書いているように、基本的にはその延長線上で考えております。しかし、話をしているうちに全然違う内容になるかもしれないと思いながら、報告させていただきましたと思います。

いずれにせよ、戦後政治史について話すことは大変大きなテーマで、石川真澄さんの本[『戦後政治史 新版』(岩波新書、2004年)]にしろ、北岡先生の本にしろ、どういうふうには書評すればいいのか、だいぶ悩みながら書いてきました。実はそのほかに、前回報告された河野康子先生の本[『戦後と高度成長の終焉』(日本の歴史24 講談社、2002年)]にも、私はそれなりに影響を受けているというか、すごい本だと思いつつながら読んでいたので、それにも少し触れながら報告したいと思っております。

あとでまた詳しく申し上げますが、石川さんの『戦後政治史』は、もちろん自民党のことにも触れておりますし、第三党にも触れていますが、社会党の記述がたいへん多いわけです。私の頭の中では、北岡先生が自民党を書かれ、石川さんが社会党を書かれたということで、この二冊をテキストとして取り上げたわけですが、必ずしもうまくいっておりません。もしかすると、原[彬久]さんが中公新書で書かれた社会党の本(『戦

後史のなかの日本社会党』2000年)のほうがよかったのかもしれないと思いながら、報告をまとめてきました。ですから、少し中途半端なものになるかもしれませんが、議論の叩き台ということでご了解いただければと思います。

現在まで、戦後史についての本格的な通史はほかにあるのだろうかと考えてみましたが、必ずしも多くないと思います。すぐに思い浮かぶのは、升味〔準之輔〕先生の『戦後政治』(東京大学出版会、1983年)と『現代政治』(東京大学出版会、1985年)、正村公宏さんが書かれた『戦後史』(筑摩書房、1985年)、『図説戦後史』(筑摩書房、1988年)です。それから、今日ご報告する石川真澄さんの本と北岡さんの本。さらに、猪木〔武徳〕さんが日本の近代の7巻で『経済成長の果実』(中央公論新社、2000年)を書かれており、田中〔角栄〕の時代ぐらいまでですが、たいへん良い本だと思って読みました。それから河野先生の本があり、最近では福永文夫さんが一冊本を書かれました(『戦後日本の再生』丸善、2004年)。そういう形では出てきておりますが、戦後史、特に新しい時代は、歴史の対象としてまだまだ未開拓の分野であるというのが現状だと思います。しかし、逆にいえば、これから戦後史をやる人間としては、非常にやり甲斐がある分野であるとも言えると思います。

そういうことは、実は私がオーラルヒストリーのプロジェクトに関わってきたときの一つのモチベーションでもありました。戦後史をどのように書いたらいいのか、私は常に考えてきたつもりです。私は必ずしも戦後史の専門家ではなくて、私が論文を書いたことがあるのは、保守合同の直後ぐらいまでです。それ以降の時代については、オーラルヒストリーをやりながら勉強してきたので、変わったタイプの戦後史の勉強をしてきた人間ではないかと思っています。そのプロジェクトをやりながら、自分が知ったことは、いままでの研究の中でどのぐらいのことなのか検証する時間がいままで本当にありませんでした。今回科研費が取れたということで、そういう検証も自分でやりたいと思っております。今回の報告はその準備作業の意味もあるかと思っています。

報告は、大きく二部構成になっております。一、二それぞれ30分ぐらいずつでお話しできればと思っております。一つ目が、「戦後史研究の視点について考える」ということで、少し大雑把に、二冊の本の成立の背景や、あるいは、伊藤先生が最初におっしゃった同時進行的な政局との関係にも少し触れてみたいと思います。これは非常にマクロな話になるかと思っています。二つ目に、内容紹介を少しやってみたいと思います。詳しくやるとたいへん長くなってしまいますので、少し端折りながら、整理してお話しさせていただきます。

I. 戦後史研究の視点について考える

(1) 二つのテキストの成立背景―「失われた10年」と政治改革―

武田 まず、二つのテキストの成立背景について少しお話しさせていただきます。何故成立背景の説明が必要なのかというと、これらが1990年代半ばに書かれたことにそれなりの意味があるのではないかと考えるからです。歴史研究、特に実証主義の歴史研

究は、対象からある程度の距離感がないと成立しません。戦後史研究がなかなか政治史の対象とならないのは、一つにはその距離感の問題でもあろうかと思えます。

北岡先生は、『自民党』のあとがきでも、同じようなことが書かれています。「政治史研究者はデータがないと腕が奮えない」。それは、特に政治史研究の面白さである個人や集団の意図等をまだ確定できる段階にはない、という意味を含んでいると思えます。確かにそういう面はあろうかと思えます。ただ、2002年に河野先生は、『戦後と高度成長の終焉』の終章で、「戦後を距離感をもって眺めることがだんだん可能になってきている」と書かれています。「それを可能にしたものとして、二つの点が挙げられる。一つは、自民党が野党となったという事件が93年に起きたこと、もう一つは、社会党が消滅したこと」と書かれています。この二つは確かに、戦後史をある程度の距離感をもって眺めることを可能にした事実ではないだろうか、私も思えます。もともと、その状況は今回の選挙でも大きく変わったわけです。自民党は一度野党になりましたが、今回は圧勝しました。これをどのように説明するか、なかなか難しい話ですが、自民党が下野したときに佐藤誠三郎先生が、「自民党は駄目になっていない、いずれ必ず復活する」ということを論文で書かれていたと思えます。その記事をコピーして持っていたはずですが、今回見つからなかったのも、またあとで補足したいと思えます。

しかし、いまの小泉自民党は、必ずしも古い自民党ではないのではないかと。北岡さんの本を踏まえて言えば、古い自民党の時代は確かに終わったのではないかと思えます。そういう意味では、戦後を少し距離感をもって眺めることができるような雰囲気になっているのではないかと思えます。石川さんのこの本は新版ですが、旧版は95年に書かれました。新版はそれ以降の10年の動きを山口二郎さんが加筆したもので、おそらく戦後全体を書いた通史としては、95年の旧版で北岡さんの本と石川さんの本との二冊が揃った、時代の一区切りがついた段階で書かれた。私の言葉でいえば少し「距離感をもって」戦後を見られるようになった時期に書かれた最初の通史は、この二冊ではないかと思えます。

それから、成立事情に少しこだわりたいもう一つの理由は、石川さんも北岡さんも、研究者であると同時に、記者として、あるいは評論家、知識人として何らかの意味で国政の動きを同時進行的に敏感に察知するような活動をずっとしてきた人であるということです。[執筆] 当時がどんな時代だったのか、改めて詳しく説明するまでもありませんが、一つの時代が終わって、新しい政治の形をつくらなければならないという時代の雰囲気があったように思います。私はちょうどその時代に研究を始めたので、その時代の雰囲気をかなり意識しながら研究を進めてきました。石川さんはこの本を書かれたあと憲法調査会の公証人になり、北岡先生は外交評価パネルの座長となって、改革や変化にそれなりに関与する立場になります。そういう作業をすることで、戦後政治の特徴といいますか、改革すべき対象としては古さということになるのでしょうか、そういうことを自分なりにまとめる作業を必然的にしてきたのではないかと思えます。この二冊の本はおそらくそういう形で書かれたのではないかというのが、ここで私が言いたいこ

とです。

これはある意味で歴史研究のあり方にかかわる問題でもあります。歴史研究は時代の状況とは関係なく成立する、という考え方もありますが、E.H.カーの有名な言葉に「歴史とは過去と現在の対話である」というものがあります。何らかの形で現在の状況を想定しながら歴史を書く方法も当然あるわけです。また、E.H.カーは別のところで、「歴史書からは、それを書いている歴史家がいったい何を考えているのかを読みとるべきだ」と言っています。たしか「心のざわめき」というたいへん美しい文学的な言葉を使っていたと思いますが、この二冊の本にも、二人の著者の「心のざわめき」のようなものが聞こえるのではないかと考えております。

当時の改革論は、一つは、政策の内容を変えなければいけないとする動きがあり、もう一つは、統治の仕組みを変えなければいけないという動きでした。レジュメに書いてありますので詳しくは触れませんが、そういう動きを二人とも何らかの形で念頭に置きながら話を組み立ててきたのではないかと考えております。北岡先生、石川さんそれぞれ評論を書かれておまして、その評論も少しは読みました〔石川真澄『墮ちてゆく政治』（岩波書店、1999年）、北岡伸一『「普通の国」へ』（中央公論新社、2000年）、『日本の自立』（中央公論新社、2004年）〕。皆さんお読みでしょうけれども、もし必要であればお返ししますのでご覧ください。その評論を読むと、もう少しこの本が書かれた時代に、石川さんや北岡さんがどういうことを考えていたのかわかるだろうと思います。どうしてこういうことを気にするかといいますと、戦後の通史を、あるまとまった段階で初めて書いたこの二人の著者が、どういうことを考えながら戦後の何を捉えたのかを確認することによって、その後の戦後史研究が課題とすべき論点が、少しは見えてくるのではないかと考えたからです。

(2) 政治学者の戦後政治のイメージと枠組

武田 1990年代にいろいろな改革の議論が進みますが、その過程で、政治学者が発言する機会は結構多いわけです。そもそも戦後の日本政治を対象とした政治研究は、歴史家よりも政治学者の活躍する時代でもあることは、前回の河野先生の報告にもありました。政治学が戦後政治をどのように捉えて、どのような筋道を日本の政治がたどるべきだと考えてきたか、レジュメに少し挙げてみました。

一つは山口二郎さんの議論です。山口氏は『戦後政治の崩壊』（岩波書店）を2004年に書かれています。戦後政治は、「9条安保体制」・「一党優位体制」・「利益政治体」・「官僚内閣体制」の四要素の包括的なシステムであると考えられるとして、これは日本政治の特色だが、イコール自民党政治でもあると定義して、それが93年に終わりを迎えた。現在は過渡期であって、これからの日本が進むべき道は、イギリスの「第三の道」のようなものである、という議論をしています。もう一つは大嶽秀夫さんが出されたもので、戦後政治の対立軸は基本的には防衛問題であったという議論です。90年代に国際貢献論が出されてきましたが、防衛問題に代わる政策対立軸にはならなかつ

た。これから対立軸になるべきものは、新自由主義（新保守主義）と社民主義（リベラル）であるが、それはまだ形成されていないというものです。

政治学者の発想は、おそらく政治史研究者の発想とは違っておりまして、それなりにわかりますけれども、必ずしも実証した成果として戦後政治をまとめているわけではないと思います。また、何らかのモデルを外から持ってくる形で政局を分析していることもわかります。つまり、歴史を踏まえた議論とはやや異なる発想をしていると思います。もっとも「第三の道」型になることや、新保守主義と社民主義の対立軸ができないというわけではもちろんなく、そういう可能性も当然あると思います。私はそれを言う立場にはございませんので、これ以上触れませんが、そういう差異があることをここで申し上げたいと思います。

(3)二つの戦後史イメージと 90 年代に始まる戦後史の研究の視点

武田 それに対して、石川さん、北岡さんはどのようなスタンスをとっているかといいますと、基本的には石川さんは、保革の対立軸でいえば「革新」の側、少なくともそれに期待を寄せる側に立って本を書いていると思います。一方、北岡さんは「保守」の側、自民党の側、特に 90 年代に入ってからには小沢 [一郎] を支持、評価して期待する立場で書いています。そういう立場での戦後史イメージが出てくるのではないかと思います。

詳しく言いますと、石川さんは、自民党一党優位性に対する懸念と、革新勢力、特に社会党の実態を変革が必要であるとする立場からの戦後史イメージをつくっていると思います。そのような枠組は 90 年代半ばに崩れてしまいましたので、石川さんの現状への危機感はいへん強いと思います。しかし、その将来イメージは必ずしも明らかではなく、新版で山口二郎さんが加筆された部分は、おそらくは石川さんご自身もうまく書けなかった部分なのかもしれないと思っております。

北岡さんは、基本的には自民党の一党優位性を所与のものとして認めて、それを一定程度肯定するスタンスをとっていると思います。自民党は日本の発展に貢献したと評価しています。しかし 70 年代以降、国際情勢が大きく変化する中で、自民党は硬直化していく。それ以降の政治は、自民党を維持する目的には合致していたかもしれないが、日本が先進国の仲間入りをして、国際社会でそれなりの責任を分担しなければいけない時代には、少なくとも適合的ではなかっただろう。それを打破して自民党を割った小沢一郎に対する評価が常に高くなっていくという筋道になっているだろうと思います。北岡先生は、小沢が自民党を割ったわけですが、どのように二大政党制を構築していくかはずっと関心を寄せています。そして、将来について必ずしも悲観的ではありません。

例えば石川さんが 98 年頃に書かれたエッセイがあります。『堕ちてゆく政治』というタイトルの評論集ですが、その中に、「政治資金規正法の改正後も汚職は絶えないけれど、そういう自民党を第一党にする国民を衆愚だとは思えない、必死にこらえている」という記述があります。その危機感是非常に強く、北岡先生のイメージとは大きく異なる点だと思えます。

(4)まとめ

武田 政治学者は1990年代にたくさん発言しておりますが、「脱歴史」とは言わないまでも、やや紋切り型の歴史理解の上で戦後政治を総括して将来を展望しています。それに対してこの二冊の本は、それぞれの戦後史のイメージを踏まえて、あるべき変化の枠組を考えていこうとする態度を持っているのではないかと思います。歴史と現在、近い将来を渾然一体として考えるスタンスは、これからしばらく政局の変革が続いていくでしょうから、戦後史研究の一つのスタンスとしてあり得ると思いますし、それが歴史研究の一つの強みにもなっていくのではないかと考えます。石川さんの議論は、社会党が消滅したことで、将来像を想像する契機を失っている感じがしますが、北岡さんの議論は、まだしばらくは生き続けるのではないかと感じております。詳しくは、第Ⅱ部の「内容紹介」でお考えいただければと思います。

戦後史研究のもう一つの視点があり得るだろうと思うのが、河野さんの提示した視点だと私は考えます。石川さんが「革新」への関心、北岡さんが「自民党」への関心を持っているとすれば、河野先生が持っているのは、前回の研究会の終わりで伊藤先生がおっしゃったように、「中道」というか「第三勢力」への関心だと思います。本の記述を比べてみても、石川さんも、北岡さんも、例えば民社党、新自由クラブ、社民連への関心はそれほど高くありませんが、河野先生の本ではかなりの重点が置かれています。河野先生は、「1970～90年代の歴史は『保革伯仲の時代』というよりは、『第三諸政党』が自律性を持って国会審議に影響を与えている時代である」という言い方をされています。それなどはその典型だろうと思います。レジュメに詳しく河野先生の本の理解を書きましたが、特に河野先生は、90年代に入って細川〔護熙〕、武村〔正義〕などが民主連合や社民リベラルのようなシンボルを使って勢力を築いていく点に注目していると思います。始まりは保守合同が行なわれる以前の多党制の時代であって、それと90年代以降の連立政権の時代を踏まえていくと、もしかしたらそれが戦後政治の一つの筋道をつくるのではないか、という理解をされているのではないかと思います。今日はいらっしゃらないので、本当にそのように考えていらっしゃるのかわからないのですが、二大政党制ではなく複数政党制であって、連立政権が一つの常態になっていくようなイメージを、河野先生はたぶん持っておられたのだろうと思います。しかしそのイメージは、今回の選挙で大きく崩れてしまったわけですが、今後、自民党があまりにも大きくなって割れる可能性もありますし、この見方は、もしかしたらこれからもある程度有効なのではないかという含みを持たせながら、報告を続けます。

以上のような三つのイメージが、90年代以降、大きな研究として出されているのではないかと思います。それを「戦後史研究の三つの視点」とすれば、何も新しいものではありませんが、①革新陣営の研究（社会党・共産党）、②自民党の研究、③第三諸政党の研究となると思います。それぞれ、まだまだ補足すべきところ、深く論じるべきところはたくさんあると思いますが、それぞれの立場で戦後を通暁するような研究が

できている段階ではないかと思います。ただ、社会党の研究については、例えば原さんの研究がありますし、そういうものも論じてみないとわからないところはあると思いますが、いま長々と申し上げてきたようなことを考えながら、この二冊の本を選んだわけです。

Ⅱ. 内容紹介と論点（石川真澄『戦後史』）

武田 「内容紹介と論点」に入ります。基本的には、石川さんの本と北岡さんの本を交互に重ね合わせながら、内容を紹介していくという形をとりたいと思います。ページ数はレジュメには少し入っておりますが、最終的に原稿が出てきた段階で詳しく校正しますので、目安という形で考えていただければと思います。

(1) 書誌的考察

武田 石川さんの本についての簡単な紹介をします。石川さんは、『戦後政治史 新版』のおよそ 20 年前に、『データ戦後政治史』（岩波書店、1984 年）を書かれています。レジュメの「構成の変化」を見ていただければと思いますが、この本は、そもそも最初は二部構成をとっていました。第一部と第二部は、ほとんど同じぐらいの分量です。第一部は 16 節構成で、[ロッキード事件の] 田中判決が出たところまで書いています。そして第二部が、おそらくは『データ戦後政治史』が最初に出されたときの一つのウリだったと思いますが、「民意の軌跡」という部分があって、8 節構成です。選挙研究は、おそらく 80 年代にはかなり本格的に進められたと思いますが、歴史的な含蓄をもった形で選挙を捉えてそれをデータ化し、民意がどのように動いたかをまとめたという意味では、非常に画期的な本だったのではないかと思います。私は詳しくはわかりませんが、いま読んでそれなりに読み応えのある部分だと思います。ただ、あとでも少し触れますが、この部分にはかなり批判もあったようで、後の選挙研究でだいぶ否定される形になっています。

『戦後史』（旧版）は 1995 年、『データ戦後政治史』の 10 年後に出ました。26 節構成になっています。「保守政治の拡大」という 26 節までが旧版に当たります。つまり『戦後史』（旧版）が 1995 年に出たときには、補論として「民意の軌跡」が 2 節分入っていました。このときに、『データ戦後政治史』の第一部をかなり加筆しています。それは 16 節まで書いていたものに 10 節プラスしただけではなく、だいぶ書き加えています。あとで、この点に若干触れたいと思いますが、だいぶ変わっています。そのときに「はじめに」もつけられ、「論」ではなくて「史」であることをかなり強調しています。10 年後の『戦後史 新版』になりますと、31 節の構成になり、「民意の軌跡」の部分が完全に消滅してしまうことになります。

執筆方針ですが、基本的には時期の区分方法が選挙ごとであることが一つの特徴です。これは『データ戦後政治史』が書かれたときに、戦後政治が選挙によって決められる、つまり民意によって決められる体制だとすれば、選挙ごとに何らかの違いがあるだろう。それが反映されているに違いない。あるいは反映されていないのであれば、そのとこ

ろが面白い、という意識で書かれたことと関係あるだろうと思います。それは新版に至っても基本的には同じだと思います。ただ旧版は、『データ戦後政治史』で書けなかった戦後改革、占領改革の部分に、かなり記述を費やしていて、言葉がかなり増えていることが一つの特徴です。そして新版では、山口二郎さんが95年以降の部分を加筆しています。「はじめに」では、「二人の閲歴の違いによる記述の違和感はない」と書いてあります。こういう形で『戦後政治史 新版』ができたわけです。

次に、どういうところが加筆されて、どういうところが修正されたのか見てみます。例えば第二節8～9ページで、天皇・マッカーサー会見について触れられています。これは、『データ戦後政治史』にはまるでないところで、そこにおける天皇観もない部分でした。第四節では、民主人民戦線があったけれど、社会党が共産党に食われるかもしれないとして参加しなかったとする部分は、『データ戦後政治史』にはないんですね。旧版ができて初めて触れられたものです。その後、社会党の片山政権ができて政権をとるわけです。「保守対革新の絶対得票率は3対1であって、1½体制がこの段階からできていた」という記述はそのままですが、『データ戦後政治史』には、実は次のような記述がありました。この選挙で社会党が第一党になるわけですが、「この選挙は、国民の多くがまだ旧勢力の後継者たちを支持しており」、つまり保守対革新の集票率が2対1であることに触れるわけです。「いわゆる進歩派は全国的には弱いのだという事実を正確に告げていた。しかし、時代の気分は、革新の当事者たちにそのことを重く考える余裕を与えなかったようである」。この記述は、旧版では削除されていることがわかります。

六節、七節の41ページからの「語り継がれる失敗」にも、削除されている部分があります。「片山内閣の失敗は長く社会党にとっての教訓であり続けているが、批判や反省の弁の中に、当時の彼我の勢力や、明らかに示された民意に配慮した見解を見つけることはほとんどできない」。42ページの終わりの3行にそれが入っていました。少し柔らかくなっている印象を私は受けますが、このような変化があります。それから、八節、九節で、総評が形成されるところが書かれています。総評の結成云々は、『データ戦後政治史』では一言も触れられていません。戦時中から戦後にかけての部分について石川さんはかなりボリュームを増やしたわけですが、かつて書いた部分を削除しているところもかなりあるわけです。

見出しも少し変わっているところがあります。レジュメで少し触れておりましたが、31ページで、戦後最初の総選挙において新人が八割当選したということで、小見出しが「新人八割」とついであります。『データ戦後政治史』では「新人八割と旧勢力から二割」という言い方がされているんですね。「新人が八割」の部分は独立して触れられているわけですが、おそらく石川さんは、この時期を加筆しながら、戦後的なものが戦前に打ち勝っていくことを一つは主張したいのだと思います。しかしそれが社会党左派の論理（「時代から遊離した理屈」と書きましたが）によって、その可能性が少しずつ弱まっ

ていくというイメージを持っているだろうと思いますが、左派批判の部分が若干削られております。

一つ私的な考察として論点を挙げるにとどめたいと思います。戦後改革の部分の分量をかなり多くしたことで、戦後になっていろいろなものが変わっていくイメージを石川さんの本からは受けます。一方、北岡さんの本には、たいへん長い序章があります。ここは本当に素晴らしい記述だと思いますが、日本の近代における政党の起源から説き起こして、吉田〔茂〕が戦後をつくっていく様子を描いています。つまり保守合同ができる前までの様子を描いていくわけです。ここで一つ重要なメッセージだと思うのは、その時代までの派閥のイメージは、むしろ戦前の派閥にやや近いのではないかと、ということです。いわゆる自民党派閥と言われるものが、日本の政治文化の特色であることはないのだということを、ここで主張しているのではないかと思います。その過程で吉田や鳩山〔一郎〕への言及もたいへん多いわけですが、石川さんの記述には吉田や鳩山への言及はたいへん少なく、あってもたいへん印象が薄い感じがいたします。

(2) 岸の時代まで

武田 石川さんの本では、自民党結成の部分はかなり長いわけですが、石川さんの記述の力点が一つは、1958年の岸〔信介〕の時代の選挙にあると思います。この選挙は、石橋〔湛山〕内閣から岸に替わったばかりの選挙で、これは55年体制下の最初の衆議院選挙です。もちろんその前には、1956年に参議院選挙がありますが、ここでは自民党が負けて、社会党が議席を伸ばしました。社会党はこれによって非常に勢いを得て、準備万端で衆議院選挙に臨みましたが、思ったほどの議席は取れなかったわけです。これに対して逆に自民党は1議席減で済んだので、岸はかえって自分の政局運営に自信を持つことになります。しかし、石川さんのさまざまな選挙データを使った分析によると、この選挙は過去最高の投票率の選挙であって、その関心を引き受けたのは基本的には社会党であるということです。にもかかわらず、社会党は敗北感を持った。ここに一つの問題点があると石川さんは主張しています。社会党は国民の意思を正確に読み取る努力をしなかったという評価をしていると思います。これに対して北岡さんのこの時代の記述は本当に素晴らしいもので、だいぶそのイメージが違うと思います。

また、石川さんは86ページの部分で、自民党がこの時期、アメリカから資金援助を受けていたことに触れています。しかし、社会党がソ連から資金を受けていた疑惑があることには（まだ認めていないだろうと思いますが）、ここでは触れておりません。この部分は、『データ戦後政治史』から旧版になったときに加筆された部分です。社会党が1958年の選挙以降、衆議院で過半数を取ることを想定していない、つまり候補者を過半数以上立てていないことにもここでは触れていませんが、北岡さんは触れていると思います。

民社党の結成についても触れておりますが、もう少し詳しい記述があってもいいと思いました。山口二郎さんと石川真澄さんが編纂された『日本社会党―戦後革新の思想と

行動』（日本経済評論社、2003年）の中で、中北浩爾先生が論文を書いております。中北さんが論文を書くまでには、社会党の分裂に対する論文がないと書かれていましたので、まだよくわかっていない部分だろうと思います。

（3）池田の時代

武田 次に、池田〔勇人〕の時代です。94 ページで宮澤〔喜一〕さんの安保効用論に触れています。つまり安保条約締結の結果として、日本は非生産的な軍事支出を最小限にとどめて、ひたすら経済発展に励むことができた。宮澤さんの『社会党との対話』（講談社、1965年）の中で触れられているものを引いて、安保を経済的な効果があるものと解釈する形で、池田政治は進んでいくと記述しております。これを読んで思い出したのですが、宮澤さんへのオーラルヒストリーでは、社会党をどのように考えていたのかは、たしか聞かなかったのではないかと思います。ただ、宮澤さんは「集団的自衛権の行使を認める」という発言を1990年半ばにしております。それを書いた論文を手渡されたことは非常に印象的に覚えています。〔私たちが実施した〕オーラルヒストリーではこの部分は聞き忘れたと思います。

「社会党変貌の挫折」の項目は『データ戦後政治史』では十三節と一緒にいたのですが、これを独立させて十四節にしております。池田の時代についての記述は、通り一遍というか、基本的な事実を押さえたものだと思いますが、石川さんの関心はこの時期の社会党の改革に向けられていると言えらると思います。特に103ページに「長期低落の傾向」の見出しがありますが、この部分全部が加筆部分です。この部分とは、つまり石田博英の論文を引いて、自党内にも「社会党政権が成立するかもしれない」との危機感があった。それなりにチャンスであったけれども、「左翼教条主義」（石川さんが使っている言葉です）が、日本の変化に対応し切れなかったことを示すものである。「そういう形で、この時期から社会党の長期低落傾向が始まる」と書いています。構造改革論にそれなりに親近感を持った記述になっていると思います。

（4）佐藤の時代

武田 次の佐藤時代は15節からですが、1967年の選挙において、データから見れば後の保革伯仲が始まっているとの見方をここで示しています。この見方はたいへん鋭いと思いますが、ご承知のとおり、1969年の選挙では300議席を取って自民党が大勝します。今回は300議席に届きませんでした。このときには、「犬養・政友会が303席を取りましたので、自分も303席に届きたい」ということで、ずいぶん数字に苦労したというようなことも書かれています。それぐらいの大勝でした。この大勝の理由の一つは、社会党支持者の投票棄権率がたいへん多かったことだそうです。社会党は特に都市部で票を減らしています。『データ戦後政治史』を見ると、この時期にあった過激派の動向を踏まえて、過激派の支持者が社会党に投票しなくなったのだろうと石川さんは推測しています。

田中善一郎さんが最近、『日本の総選挙 1964-2003』（東京大学出版会、2005年）という本を出されました。この本は総選挙のさまざまなデータをわりにわかりやすく書いてくれているので、私は選挙研究がほとんどわからないので参考にしました。1969年選挙のデータの解析・分析のところでも、田中善一郎さんは石川さんのこの見解を引いております。ただ、ここで一つ思ったのは、大変緻密な選挙研究ですが、数字だけではその変化の理由は説明できないだろう、ということです。どうしてこのように棄権率が上がったのかを論じるには、別の理由を数字以外から探さなければいけないと改めて感じました。話を元に戻しますと、社会党[支持者]からの棄権者がたいへん多かった。そして自民党が勝った。しかし得票率を見てももちろん多党化が進んだことを、データから石川さんは導き出しております。これもたいへん重要な見解だろうと思います。

(5) 田中の時代

武田 田中の時代になりますが、1974年の選挙では「今太閤ブーム」ということで、田中はたいへんなブームを呼び起こします。しかし1972年の選挙では、そのブームが票に結びつかず、自民党はかなり深刻な打撃を受けることとなります。これに対してこの選挙では、共産党が躍進いたします。39議席をとりますが、これは史上2番目です。一番多かったのは1978年の選挙だと思いますが、この時期に共産党が躍進している。石川さんの理解では、共産党がこの時期、組織拡大の努力を続けている成果であろうということです。またこの頃、共産党はソフト路線をとっているわけですが、そういうこともあって、社会党の票が共産党に流れていったのではないかという理解を示しています。そしてそのあとは政局の話ですが、1974年の参議院選挙は金権選挙と批判されて、立花さんの田中批判が出て、田中は退陣することとなります。

Ⅲ. 内容紹介と論点（北岡伸一『自民党』）

武田 同じ時期を扱った北岡さんの記述はたいへん読み応えがあって、『自民党』の白眉の一つではないかと思えます。石川さんの本が総選挙を対象にして、それで区切りをつけているとすれば、北岡さんは総裁選挙で区切りをつけています。

(1) 岸の時代まで

武田 最初のところは、渡邊恒雄の『派閥』（弘文堂、1958年）などでもすでに論じられていることですが、1956年の総裁選挙で戦後の自民党の派閥の核となる、いわゆる8個師団、8派閥が形成されます。それが戦後の自民党の派閥の原型なのだ。それまでの緩やかなグループとはちょっと異なった政治集団として、派閥がこの時期から形成されることを論じております。

北岡さんの岸に対する評価はたいへん高いもので、石川さんが通り一遍の記述であるのに対して、北岡さんの岸に対する筆致はたいへん勢いもあって優れていると思えます。『戦後日本の宰相たち』（渡邊昭夫編、中央公論社、1995年）でも、北岡さんは岸に

ついで一度書かれていますので、それを少し読みやすくした意味もあろうかと思えます。一つ、北岡さんがその後言っていることは、「自民党ができたのは 1955 年である。しかし鳩山は暫定総裁であった。石橋は短命に終わった。そうであれば、岸が事実上の最初の総裁と言ってもいいのではないか」ということです。確かにそういう側面はあるだろうと思えます。

岸の行動の理解はたいへん鋭いものだと思います。例えば岸は、総裁になるまでに組織の要を務めることによって組織を掌握していく。それを踏まえて総裁になる戦略を立てた、という理解はその通りではないかと思えます。また、岸が最初は憲法改正を目指すわけですが、結局は安保改定に変わっていく。それはある種の政策の変化ですが、その変化の過程を説明する筆致も、非常に説得的であると思えます。それぞれ原 [彬久] さんが書かれた岸の伝記 [『岸信介』 (岩波新書、1995 年)、『岸信介証言録』 (毎日新聞社、2003 年) や坂元一哉さんがかかれた『日米同盟の絆』 (有斐閣、2000 年) などの議論も、たいへん上手に取り込んでいる印象があります。

1958 年選挙の理解の仕方ですが、この選挙を北岡さんはたいへん高く評価しています。「自民党が社会党の伸びを抑えて長期政権の基礎を固めた、極めて重要な選挙だった」と評価しています。この選挙を踏まえて、1959 年の内閣改造において池田を入閣させた。その後、池田が総裁になるときは、岸も池田を支えていくプロセスがここから生じるわけですが、そのプロセスで「保守本流」なるものが確立したと北岡先生は指摘しております。「保守本流」にはいろいろな意味がありますが、北岡先生の定義によれば、「日米協調路線の維持強化を図る勢力である」と理解するのが最も説明力の高いと言っております。これを踏まえて北岡先生は 1980 年代半ばに、「1960 年体制論」という議論を展開しております。1960 年になって自民党は安定した、とする議論です。これに対しては中北さんや空井護さんが批判している面もありますが、自民党の安定化は、1955 年でなく 1960 年だというのは、その通りではないかと思えます。

(2) 池田の時代

武田 池田の時代になりますが、それから佐藤の時代にかけては自民党の黄金時代であり、第二章がそれに当たります。ここで「保守本流」が確立していくわけですが、これを生んだのは岸であるとするのが北岡さんの理解です。しかし、この 1960 年体制は岸の取り組んだ憲法改正の課題には決して取り組まなかったことも、北岡先生は触れておられます。池田時代には、党内抗争がたいへん激しくなります。まず吉田が池田を批判して、岸・佐藤も池田を批判します。そして、福田も経済成長を批判することになります。その理由は、池田を支えたさまざまな支持者が、池田が実際に展開する低姿勢の政治運営に対して批判を強めていったからです。実はそういう姿は本来の自民党の姿でもなかった、と北岡先生はおっしゃっています。この頃から 8 個師団ができて、少しずつ変わっていきますが、自民党の派閥政治も本格的に繰り広げられるわけです。

ここで少し思い出すのは、松野頼三さんのオーラルヒストリーです。松野さんは、佐

藤 [栄作] 派の五奉行の一人です。その中にいて、自分は福田に近かったと言っています。田中は池田に近かった。派閥がある程度合理化されて確立していく中で、佐藤派の中には福田に近い人物がいて、池田に近い人物がいる。これは良いことなんだというのが松野さんの発言だったと思います。それは「派閥の触覚だ」という言い方をしていたと思います。つまり派閥抗争が激しくなると、派閥間の探り合いも活発化していくわけで、触覚となる人物が必要になる。そういう人間が情報を取ってきて、ある種の政界運営のキーパーソンになっていく。そういう人物がまだ必要な時代であったと思います。それが 1980 年代以降は、またあとで触れますが、若干異なった派閥運営になっていくと思います。

池田の時代において党内抗争が激しくなって、それに対する対処として三木武夫らが党組織委員会を組織して、近代化の答申を出していくわけです。北岡先生も、石川さんが触れている石田論文に触れておきまして、石田論文の言うように社会党政権ができるという危機感が自民党にも出てくる。それに対して自民党は、選挙対策としては後援会を機能させていくと北岡さんは言っています。1958 年頃から後援会が機能していると書いていますが、これは升味 [準之輔] 先生の議論だと思います。[P.W.] セイヤーが自民党政治に触れていますが、セイヤーの論文では、ヒアリングの結果、1952 年ぐらいから戦後の後援会ができていると書いておきますので、1950 年代初めにできて、58 年ぐらいから機能していく。それが本格的に効果を発揮するのは、社会党政権ができるかもしれないという危機感を背景にしているということです。

石川さんが後援会に言及した部分はないと思いますが、実はデータのほうではしばしば後援会に触れております。レジメに表をつけておきましたが、実は 1950 年代、60 年代に、石田論文が言っているように、「総保守」の集票率は一貫して低下しているわけです。折れ線グラフの線は、1950 年代初めから 70 年代までずっと下がりっぱなしです。その次の「棄権・無効」の線はだんだん上がっていきます。つまり、「棄権・無効」票の増加と「総保守」の集票率が反比例していることになります。

田中善一郎さんの一つの理解は、このころには自民党に入れるはあるいは棄権するかという人が増えているのではないかと。つまり、自民党に入れるべき人が棄権しているので、棄権票が増えて自民党が減っているのではないかと。石川さんはこれを後援会の問題と絡めて論じています。時間がないので詳しくは触れませんが、自民党が後援会を通して人々の投票行動をかなり縛っている。しかし産業構造が変わって都市部に流れていくと、後援会を離れた人々が公明党や共産党に吸い寄せられていくのではないかと。これを「引越し仮説」と言うそうです。しかし、これは田中さんの議論によるとどうやら当てはまらないようで、1980 年代から少しずつ、石川さんの議論に修正する動きが出てきているようです。その例としてここに挙げておきました。

(3) 佐藤の時代

武田 そう考えますと、自民党はそれなりに盤石な選挙体制を敷いていたのではないかと

と考えますが、北岡さんは、そこに自民党の危機が存在していたと言います。つまり、一つは、自民党の政治運営が、言ってみれば調整型の政治に変貌していったことです。調整型の政治が、対外関係ではほとんど効果を持たなくなっていく例として繊維交渉を挙げているのは、今回読んでみて少し新鮮だった点です。繊維交渉は、本格的なリーダーシップが必要だったはずの交渉ですが、それを佐藤は丸投げしてしまった。これは佐藤の政治運営の手法でいうと、わからないわけではない。待ちの政治、調整型の政治ですから、じっくりやっっていこうということです。しかし、その手法がこの繊維交渉では全く通用しなかったことが、北岡さんが挙げている一つの論点です。

もう一つの論点は、二世議員化が進んでいって、後援会が中心となってかなり本格的に候補者を選んでいく。これは、人材をリクルートする意味では必ずしも良いシステムではないという見解を示しています。

(4) 田中の時代

武田 そして田中〔角栄〕の時代になりますが、そういう手法では対処できない新しい時代のリーダーとして、若手議員が田中を担いでいく。しかし、その期待はすぐに幻滅に変わっていった。田中は内政でも失敗し、外交でも失敗して、自民党は次の新しいリーダーシップの形をすぐに模索しなければいけないことになります。

(5) 田中以後の時代

武田 田中以降の歴史ですが、石川さんのキーワードは「保革伯仲」と「田中支配」だと思います。ただ、石川さんの記述はたいへんさらっとしていて、私は特に引っかかるところはありませんでした。

北岡さんは、まず三木〔武夫〕を取り上げます。三木は長い間、自民党を変革するシンボルでした。しかし1976年の選挙のプロセスを見ながら、三木は田中批判に乗じた自民党の分裂の危機に、結局は分裂選挙を恐れて尻すぼみで退陣してしまった。北岡さんは171ページで、三木は断固解散に踏み切るべきであったとの議論をしております。それによって三木は、おそらく世論を味方につけることができただろう。新自由クラブの躍進を見ても、そういうことが言える。しかし三木はそれをしなかった。ブラフと妥協が三木の神髄であって、本格的な改革の力はなかったという評価をしています。北岡さんの三木の評価はたいへん低いわけですが、松野さんのオーラルヒストリーでは、松野さんは三木をかなり評価していたことを思い出します。三木は松野さんの膝をさすりながら、「自民党は壊れてもいい、しかし日本の議会は守らねばならない」と呟いたとおっしゃっていました。それがもし本当だとすれば、北岡さんが考えるような国会冒頭で即時解散という手段も、確かにあったのではないかと思います。松野氏のオーラルヒストリーで最も面白い部分の一つだったので、挙げてみました。

それから、新自由クラブや社民連についての記述はそれなりにありますが、やはり少ないと思います。田川〔誠一〕さんや藤波〔孝生〕さんのオーラルヒストリーがありま

すが、田川さんのオーラルヒストリーで少しは触れられておりました。田川さんは松村謙三を一つのシンボルにして新自由クラブを支えていきます。石川さんもこの頃、新自由クラブに少し関わって、いろいろな記事を書いたりしているという事実があります。藤波さんは、新自由クラブが割れたときに、結局自民党の中に残ったほうです。藤波さんのオーラルヒストリーには、田中角栄はたいへんすごい人物だと非常に評価している記述がありますので、そういうことも一つの理由かもしれません。

次は福田〔赳夫〕です。北岡さんの福田に対する評価も、それほど高くないように思います。リーダーは戦わないで選ばれてなるものだ、というのが福田の哲学ですが、これに対して大平〔正芳〕は真っ向から戦っていく人間です。戦わない者は戦う集団には勝てないという言い方を〔北岡さんは〕していますが、必ずしも高い評価ではないように思います。それに対して、大平に対する評価は、福田に比べて非常に高いと思います。しかし、福田・大平の時代はたいへん激しい派閥抗争の時代であって、福田は戦わずして退き、大平は戦って急死してしまいます。

そして次に始まる鈴木〔善幸〕時代から、自民党の本格的な再生の試みが始まるわけです。鈴木は「和の政治」を目指すわけで、基本的にはそれまでの激しい党内抗争を緩和するシンボルであった。党内基盤は盤石だけれども、彼にはやりたい政策がなかったという評価をしております。次に中曽根〔康弘〕が総裁になりますが、中曽根さんは最初は田中派に頼って組閣することになりますが、その後、田中が死んで創成会ができて、竹下〔登〕さんとある種のタッグを組んで選挙にも大勝することで、非常に稀な例だと思いますが、十分な余力を残して引退していった。その後、中曽根さんは首相を指名するある種の慣例をつくっていきます。それから、さまざまなニューリーダーが生まれていきますが、この間も北岡さんの理解によれば必ずしも新しいリーダーシップは生まれていないことになると思います。

1980～90年代にかけての政治において面白いのは、派閥に事務総長を設けた点だと思います。たしか北岡さんの本では1983年だと書かれていたと思いますが、初めて田中派が事務総長を設ける。しかし触れられていないのは、事務総長会議です。実は石川さんが広瀬道貞さんと書いた『自民党一長期支配の構造』（岩波書店、1989年）では、事務総長会議ができたことについて触れています。藤波さんのオーラルヒストリーでは、「この事務総長会議を主導したのは俺である」という発言があったと思います。つまり、あまりにも派閥抗争が激しい時代を経験したので、派閥間での申し合わせをするための会議が1987年ぐらいから続けられたわけで、これは同じ派閥政治であっても、1960年代の派閥政治とはだいぶイメージが違っているのではないかと思います。

そして、1980年代からさまざまなスキャンダルが相次いで、冷戦や湾岸戦争など国際政治の変動もあって、自民党はなかなか有効な対処をすることができません。その間、改革を実際に行なっていく人物の一人が小沢一郎です。243ページには、「小沢は、従来の国体政治の手法をやめて、与野党間競争による国会運営を模索していた」との記述がありますが、『日本改造計画』（講談社、1993年）によって、自民党政治の古さを

改革しようという動きを小沢は進めていきます。小沢を中心にしたグループによって1993年に自民党が壊されていくのは、実は自然の成り行きだったのだとして、一つのまとまりを北岡先生は示しております。石川さんは、この小沢の動きを基本的には田中派、竹下派、そして分裂という動きで捉えています。これは必ずしも間違いではありませんが、小沢への関心はたいへん少ないと思います。この間、土井たか子のマドンナブームについても触れておりますが、詳しいことは省略させていただきます。

IV. まとめ

武田 たいへん長くなってしまいましたが、いろいろな論点を挙げていくとキリがありませんが、四点挙げてみます。

一つは、戦後政治を理解するうえで、戦前とどのように関係してくるのか、もう一度考えてもいいのではないかと、ということです。特に講和・独立期の政治史は面白いものではないかと思えます。それはあるいは55年体制論と言ってもいいのかもしれませんが、これについては中北さんが著書を一冊出されているので、それも踏まえてもう一度考えてみていいかと思えます。

第二点は、石川さんの本を今回改めて読んでみて、戦後民主主義なるものがあるとして、それが基本的に選挙政治であるとすれば、選挙に着目して政治史を描くのも一つの方法であろうということです。北岡さんも選挙に関心が全くないわけではなく、選挙に関する記述もたいへん多い。選挙研究は盛んですが、その成果を政治史がはたしてどれだけ利用できるのか試したことはありませんが、なかなか理解しがたいところもあります。これは一つの課題かと思えます。

第三点は、派閥に着目して自民党を研究したのが北岡さんの本ですが、これですべてでは必ずしもないだろうということです。例えば派閥が基本的に政党と同じような機能を持っているとすれば、派閥がどのような政策を考えていたのか分析する試みも必要だと思います。機関紙の分析も必要だと思いますが、必ずしもそれがされているわけではないと思えます。また、選挙によって派閥が政策を変えていくことも当然あると思えます。そういうことも一つの面白い論点だろうと思えます。また、社会党の派閥研究ははたしてどれだけ進んでいるのか、私はよくわからないまま報告していますが、自民党の派閥だけでなく、社会党の派閥についての研究も必要だろうということです。

第四点は、政党の組織面における研究もたぶん必要だろうということです。小宮京さんが少し手がけておられますが、報告では端折りましたが、予備選の問題もたいへん面白い問題だと思います。今回[2005年]も中央の執行部の力がだいぶ強まった選挙を行なったわけですが、地方支部の問題もたいへん面白いと思えます。

それから、政官関係についての記述はどちらも必ずしも多くないわけで、官僚が政治にどのように関与していったのかという点はたいへん面白いと思えます。例えば山下英明さんのオーラルヒストリーでは、山下さんが佐藤栄作を支えていたことが明らかになりました。彼はそれなりに資料も持っているわけですが、通産省の中には大平、宮澤と

親しいグループもいたようです。そのような研究が系統立ててできるようになれば、より面白い点が浮かんでくるのではないかと思います。

たいへん雑駁な話でした。研究史の動向を大雑把にまとめて、少し内容に入りながら論点を取り出したつもりです。全体として、こういうことをやるべきであるということは幾つも思い浮かぶのですが、こういうことをやってきたとはなかなか言えないので、たいへんみっともない報告となりましたが、とりあえず私の報告はこれで終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

V. 自由討議

■戦後史を貫通するキーワードはないか

伊藤 ご苦労さまでした。戦後政治史の研究というのは、量としてはかなりあると思いますね。僕もこの二冊を今回もう一度きちんと読みました。読んでみて、すごく読みにくかった。それは、両方を通じてキーワードが掴めないからです。

例えば北岡氏のものを読んでいると、随所に非常に閃きを感じるんですが、全体を通じて自民党とはいったい何を捉えたら捕まえられるのか[わからない]。「派閥」ということで押さえているのかというと、必ずしもそうではない。逆に石川氏のほうも、今回の『新版』で落としてしまったところがありますね。新版の中にも随所に出てくるわけですが、選挙の「絶対得票率」が彼のキーワードの一つなんですね。すなわち2対1とか、1½はあまり変わらない。彼は、自分の言う「総保守」が減って行って、「総革新」が増えていくことを期待しているんでしょうが、そうはいかない。この前の選挙もそうですが、もはや「総保守」と「総革新」によって分析することはできない。これは破綻した。破綻したから、この付録の部分がなくなった。なくなったら、その前の説明はどこに押し込んでいくのか。突然、山口二郎氏の平穩の政治みたいな話になっているんですよ。その前とは全然関係ない。二人のあいだの息が合っていると言うけれど、僕は全然合っていないと思って読んでいたわけです。

北岡氏には非常に鋭いところがあるんです。一つ、今度の選挙のことを予感しているような言葉があります。271ページに「小選挙区における投票は、実は主として党首に対する投票なのである」という短い文章があるんです。今度の選挙はこれだ！と思いました。ここで非常に大きな変化が生じたとすれば、この前の小選挙区の選挙では、民主党が「マニフェスト」と言って、今度も民主党はそれをやったわけです。要するに政権を争う選挙だ、誰が政権を担うかというふうに持っていった。しかし政策の提示の仕方がまずかったので、逆に自分のほうが雪崩現象を起こして敗れた。これは非常に面白い。北岡氏の「小選挙区における投票は、実は主として党首に対する投票なのである」というところは、「おわりに」にポロッと出てくるんです。それが、その前とどのように関わってくるのかがよくわからない。

考えてみると、大平の選挙のとき自民党大勝利だったわけですね。中曽根のときにも

大勝利。そして今度が大勝利。それらにある程度一貫しているものがあるとなれば、たぶん政策を非常にくつきりと出して、かつ、やる気のあるリーダーのイメージを売ったことにある。特に北岡氏が言っている政治のやり方は、ずっとつなげて書いていないので非常に読みづらい。大平のときに学者を集めて、いろいろな委員会や調査会をつくって、政策を策定して実行していった。中曽根のときも同じことをやるわけですね。大平のブレーンが中曽根のブレーンになるでしょう。今度の小泉のやり方は、それは学者や何かではない。けど彼にはブレーンが全然いないという松野〔頼三〕さんの評価にも拘わらず、やっぱりいたんじゃないかと思っているんです。例えば道路公団の民営化にしても、今度の郵政の民営化にしても、彼自身があれだけの立案をしているわけではないわけで、ブレーンがいた。北岡氏は、役所から上がってくる案件をこなしていくやり方が、いつ頃どういうふうに確立したかと書いているわけですが、そうでないときに大勝していると僕は読んだんです。もしそうだとすれば、小選挙区であろうが中選挙区であろうが、首相を選ぶ選挙をやれるリーダーがいればそれはできる、ということになります。

ですから、もう少し自民党ないしは戦後政治を、一つの仮説としてある程度通じて説明できるキーワードをつくって、二つぐらいのキーワードの組み合わせで説明できないのだろうか、という大変もどかしい気持ちを持ったんですね。北岡氏の本も、丸をつけて、これは卓見であると思って線を引いたところはたくさんありますが、全体が通じないんですね。だからそのとき、そのときで感心して、なるほどと思う。けれども、すごく読みにくいという印象を持ったんですね。少し暴論であっても、ちょっと仮説的な歴史説明をするキーワードがあったほうが理解しやすいし、できるんじゃないかという感じを持ちました。例えば外交問題に対する自民党の取り組みは、もう少しうまく整理できないかという感じを受けたんですね。これは、そのとき、そのときで、安保、繊維交渉、となっているでしょう。それらを通じた何かがあって説明してくれると非常によくわかる気がしますね。材料は中にあるんじゃないかなと思います。もう少しほかの人の研究とかデータによって整理できるのかなと、僕の思い上がりかもしれませんが、そういう気持ちでちょっと鬱屈しました。

石川氏も、例えば自民党政権についてずいぶん触れているわけです。自民党政権の変化について触れているところで、例えば「二重政権構造」という言葉を使っているんです。これは非常に面白い。つまり派閥のリーダーが総理になる時代と、派閥のリーダーであっても、ほかの派閥の傀儡という場合がある。派閥の連合ではないんですね。裏に田中がいる場合と、竹下がいる場合がある。先ほど武田君は「中曽根が総理指名云々」と言いましたが、中曽根が指名したのは次の竹下だけ。その構造の変化は、それはそれでまた非常に面白い。先ほどの派閥の構造と考え合わせると、何か一つ図式ができるのではないかという気がしたんですが、いかがなものでしょうか。

武田 派閥の問題でいうと、大派閥ができていくわけですね。北岡さんの考える自民党の派閥政治は、派閥が三つ必要だ。三つ集まれば総裁ができる。しかし大派閥になると、

ほかの派閥とくつつく必要は全くない。そういう時代が何年続いたことになるんでしょうか。田中の時代もそうだとすると何年も続くわけですが、派閥が大きくなってしまえば――。

伊藤 それでも、派閥一つでは〔内閣は〕できないんですよ。比例配分するか、それとも傀儡をつくるかですね。「田中曾根内閣」をつくるか、ないしは〔閣僚に〕田中派をたくさん入れる。田中曾根内閣は人的配置としては、まさにそうですよ。

武田 でも、派閥があまりにも大きくなると、なかなか派閥の結束感が保てないという側面もあるんじゃないですか。例えば事務総長という役職をつくったのも、一つはそういう理由であるという解釈を、たしか石川さんと広瀬さんがやった本〔『自民党一長期支配の構造』〕の中でしていると思います。それまでの派閥と、二重構造が成立するような時代の派閥は、果たして同じ派閥と言っていいのかどうか。ちょっと性質が違うものかもしれませんね。規模の問題なのかもしれません。例えば事務総長会議にちょっと触れましたが、そういうものが必要になってしまうことも、一つ面白い点といえば面白い点だと思います。

伊藤 だけども、派閥は事実上分解してなくなってしまった。それでも自民党だということであれば、自民党を理解するために派閥研究をどうしてもやらなければいけないわけではない。

武田 僕は別に北岡先生の議論を弁護しなくてもいいんですが、だからいまの自民党は、それまでの自民党とやはり違うんじゃないですか。

有馬 伊藤先生は、さっき全体が通らないと言われましたが、もしかしたら一つか二つのキーワードで通すほうが無理なのかもしれない。北岡氏の本は今回ざっと読み直したんですが、非常にリーダブルで、よくできた本で、ほとんど感服しました。ただ、その鮮やかさの印象があるのは、どちらかという前半なんですね。武田さんは序章がいいと言ったけれど、僕もあそこはうまいなと思いました。非常にすっきり納得させる展開です。

伊藤先生が言われたのは、この本全体を通じるものという意味ですね。しかも細かいことを言うようだけれど、この本の主題は自民党であって、戦後政治ではないんですね。そのことも含めて考えると、どこまで全体を通じるキーワードで捕まえられるものとして考えるかという問題は、考えるべき何かがあるような気がするのの一つです。

もう一つは、最後のところの「小選挙区は首相を選ぶ」という部分ですが、この本の方法とか枠組が仮にあるとして、それを支えているのは何かという関心で考えてみると、結局、北岡氏の思う「あるべき政治の形や姿」だと思っただけですね。しかしそれは、歴史過程の分析から出てきているわけではなくて、あらかじめあるんですね。その関係がどうなのかなということが、読んで思ったことです。

武田 ここで描いている自民党の分析は一つのまとまりであって、これはもうまとまりとしてある種完結している。これからは党首中心の選挙があって、与野党間競争が始まっていかなければいけないという北岡先生の理解がある。そういう枠組がある程度通用

するようになったのは、自民党が一度終わったというか壊れた後ではないかというのが、僕が最初に考えたことです。そのあと自民党がどんどん強くなってきているので、それがどうしてもうまくつながらない。そこに伊藤先生がこだわるのも僕はよくわかります。ただ、これはこれとして、まとまったすごく良い本ではないかなという気はするんです。

伊藤 でもここから飛躍しないと、次に行けないでしょう。

武田 はい、わかります。外交との関係は、本当に一つ面白い点だと思います。例えば河野先生の本は、かなりその部分に踏み込んで書いているので、本当はそこも見ていかなければいけないのかもしれない。

■歴史感覚との対比

小宮 武田さんの報告について思ったことですが、身も蓋もないことを言ってしまうえば、比較の素材としては、石川さんの本より、佐藤〔誠三郎〕先生と松崎〔哲久〕さんの『自民党政権』（中央公論社、1986年）とを比較してみたほうがよかったのではないかな。

『自民党』が出たときに社会的に非常にインパクトがあったのは、それまでマスコミが唾棄していた派閥の構造とか、族議員についても論じているからではないかな。例えば戦前の政党と比べて決定的に違うのは、一人ひとは族議員で、地元の選挙区の利益しか考えていなくても、政治家としての政策理解能力において、全体として戦後の自民党は、例えば政友会・民政党と比べて水準が上がってきている。そこで出てきたのは、みんなが誰でも大臣になれることで、自民党の政治家が勉強するようになったということです。

北岡先生の『自民党』を読んだときに非常に感じたことは、北岡先生の場合は歴史研究者として自民党を書いているけども、冷戦崩壊とともに「古い歴史」が終わった、一種の「歴史の終わり」みたいな捉え方をしていることです。北岡先生のように二大政党制を主張した人は、戦前期は失敗したけれど、戦後は民度が上がったから、二大政党制で首相を選ぶことができると思った。逆に言うと、国民の一票で政治を大きく変えることができる。戦前期に失敗したのは、政友会と民政党という同質型政党であったが故に、はっきりとした対立軸を出せなくてスキャンダル合戦になった。でも、アメリカの場合、主要政策がそれほど大きく変わらない民主党と共和党の間できちんと政権交代が行われ、社会が安定している。日本の民主主義のレベルアップの手段として、北岡先生をはじめとする優秀な学者たちが二大政党制を主張したと思います。

それに対して印象的だったのは、佐藤誠三郎先生だけがおそらく歴史の理解がある研究者として、徹底して、二大政党制はスキャンダル合戦でつぶれて、今度も絶対にそうなる、小選挙区制にすることによってせっかく伸びてきた議員の質が全体的に下がる、と言っている。佐藤先生は説明するときに過去の歴史には触れていないんですが、決定的に大きいのは佐藤先生の中にある歴史感覚みたいなものが一貫しているということです。

実は戦後の自民党政治をまともにしていたのは、官僚が政治家としてどんどん入ってきたからで、それで『自民党政権』の中でも宮澤氏などの出世が遅れたのは、政界に入る年齢が遅れたからだという説明があったわけです。要するに福田は局長クラスで政界

入りしても、いきなり岸のもとで幹部になれたのが、だんだん当選回数が増えるようになってくると、局長クラスで政界に転身しても大臣になるときの年齢は高くなるから、課長クラスでなければならない。そういうことを考えると、北岡先生のこの本と佐藤先生たちのあの本を比較したほうが、論点がクリアに出たような気がしました。

武田 そうかもしれませんね。是非いつかまたやらせていただきたいと思います。石川さんと広瀬さんの本は、先ほども言ったんですが、これはかなり佐藤誠三郎・松崎哲久さんの本を意識した本だと思うんですね。そんな感じで書いています。

伊藤 そうですか。あれに対抗して書いているんですか。

武田 対抗しているとまで言っていないかわかりませんが、自民党が何故こんなに強いのかということや、その特徴を、それなりに彼らが説明しようとしている本ではありません。それと、佐藤さん・松崎さんの本を比べても面白いですね。

伊藤 石川さんの本の「絶対得票率」云々という議論で、毎回毎回、選挙のときに調べていて、いつも1対2で変わらない、と言っていますね。冷戦が終わったら、途端に改革がなくなったので、その図式はなくなったんだけど、その1対2というのが、表面的な、あっちが勝った、こっちが勝ったということに拘わらず変わらないということが、僕は非常に面白かったですね。いったいどのように理解すべきことなのか。

有馬 それが最初に出たときは、「絶対得票率」を選挙分析に導入した最大のウリで、要するに「絶対得票率」で見えていくと、出っ張ったりへこんだりしているのは、自民党の支持層が棄権するかしないかだけで、社会党支持層は基本的には一貫している。単純に読めば、社会党の構造的な限界を指摘した本だと読めてしまう。そういう意味でいうと、皮肉ではなくて、この本はある段階までの戦後政治の構造を投票行動から指摘したとは言えると思うんですね。

伊藤 そうですね。結局、「総革新」と言ったときに、例えば民社は革新なのだろうか？そこにはいろいろ無理があるんですよ。要するに自民党以外の部分がだいたい3分の1だということは一貫している。要するに自民党が取っている部分は、だいたい3分の2である。それが変わったときが、きっと一つの大きなターニング・ポイントなんだろうね。それは戦後政治のすべての変化の始まりで、これが何から始まっているかというところ、やはり冷戦の崩壊だろうね。冷戦が崩壊して、その新しい状況に対応するいろいろな試行錯誤があって、選挙法の改正があって、小選挙区こそが改革の道だということで、細川内閣がやったわけだ。しかし、その成果を取ったのは今度の自民党だ。そういうものすごく皮肉な話になっている。

石川さんのこの本で非常に面白いのは、「二重権力構造」と非自民の悲哀というか、非自民の量と質の問題に矛盾が絶えず起こってくることですね。それは新進党の場合も、今度の民主党の場合もそうだ。山口二郎氏が追加した部分のところで、僕が非常に「あっ」と思ったのは、「小泉ブームの終焉」という部分で、「小泉ブームは完全に終わり」と書いてあるんです。ものすごい皮肉な本だな。非常に近い時期のことを書くときは、お互いに気をつけましょう（笑い）。

武田 前回、河野先生は触れられなかったんですけど、レジュメの河野先生の最後の部分は、加藤典洋さんの言葉を引用してきたものです。保革対立は結局戦後の産物であって、僕の言葉ではある種のフィクションみたいなもので、それが崩れたからやっといういろいろなことがわかるということが書いてあったんですが、僕も本当にそうだと思います。伊藤先生がいまおっしゃいましたが、民社党なんてどういうふうに理解すればいいのか。中道というのもおかしい気もするし、自民党の右のような気もするし、よくわからない。ただ、それに代わる枠組がいま何か見つかっているかということ、必ずしもそういう感じはまだないような気もします。国際環境の変化で説明するのは、もちろんすごく説得力がありますが、ただそれは資料で裏づけるのではなく、事柄がこう対応しているという形で描くしかないと思うんですね。

伊藤 仮説をつくって、仮説が時代を説明するために整合的であるかどうかということ、で物事を考えていく以外に、方法はないのではないかな。データ、資料を徹底的に追跡して分析することができるようになるには、かなり時間が経たないと無理だと思う。だけどそれができたときには、もう図式はできているだろう。その図式を戦後史についてつくった人が勝ちなんですけど、これはものすごく難しい作業だと思いますね。戦前の政治史を考えるよりは、はるかに厄介です。

武田 私は読んでいませんが、中村正則さんが戦後史を「貫戦史」というんですね。どういうことなのか、わかるような、わからないようなものですが、かなり力を入れて書かれた本のように。僕が皆さんにご連絡したときにやっとな気がついたのでまだ読んでいないんですが、それも一つあるのかもしれない。

伊藤 昔のマルクス主義者みたいに、資料に全く関係なく図式を描いてやってくれる人がいると、他の者は叩くのいいね。叩きながら自分で図式ができるから。これは階級闘争史観でやってもどうしようもないでしょう。社会主義を標榜するグループと、資本主義を標榜するグループと二つに分けるのは戦後ずっとやってきたことで、それが「保守・革新」だけれど、非常に困ったことに革新は必ずしも社会主義ではない。保守といっても、何を保守しているのか本当はよくわからない。というのは、ここにも描かれているように、戦後政治の例えば族議員あるいは政調会を考えると、戦前の政調会などは本当にとってつけたようなものでしょう。政調会が実際に力を持つていくのは戦後で、そういうものは戦後につくったんです。戦前からの継承ではない。それを一度つくったけれど、いまは壊れた。本当に壊れているかどうかわからないけれどね。

■ 二大政党制と 2005 年総選挙

所澤 いまのことにも関係あるかもしれませんが、石川さんの本を読んでいると、社会党の左派と右派の話が出てきますね。左派は急進になっていくという話ですが、最初の頃はたぶん、社会主義政権が実際に成立すると真面目に考えていたと思うんですが、ある時期から社会主義は実際には不可能だと思うようになったのではないかと僕は疑っているんですね。だけど、なおかつ政権政党に対するチェック機能が自分たちにあるとして、常に絶対にできないようなことを平気で言っているような感じがするわけです。

仮に何かの弾みで政権をとったら、彼らが言っていることを本当に実行できるのか、実際にできると思っているのか、ということがよくわからないわけです。ただ、政権政党に対して違うことを言わなければいけないという観念が非常に強くあって、それをチェック機能だと言ってごまかしている部分があると僕は疑っているんですね。学生の自治会などで反対意見を言っている者にそういうタイプが結構多くて、常に実現不可能なことを言っているわけです。それが結局、東西冷戦が消えたことによって、抛り所を失って消えていった部分があると思うんです。ところが、その後に出てきたい今の民主党は、このところずっと小泉に反対しているわけですね。

僕は、全く同じ主張をしている別の政党があってもいいと思うんです。例えば官僚機構を動かすときに、常に同じ人が政権を持っていると癒着が起きるという問題がある。だから政権党が完全に入れ替わることによって、行政の構造が健全に動く部分があるのではないかと思うんですね。一回だけ自民党が政権から降りたときに、霞が関の官僚機構はどうなるかということで、かなり迷った時期があったんですが、あっけなく[自民党が]元に戻ってしまったので、[官僚も]また元に戻る形で動いてしまったわけです。あのときの様子を見ていて感じたのは、ポピュリズムみたいですが、全く同じ主張をしている二つの政治集団があって、どちらに人気があってどちらが政権をとるかの競い合いがどうしてできないのか、ということです。今回の衆議院選挙の民主党も一所懸命小泉に反対しようとしているわけですね。反対するから票が集まらないという感じがありますね。

伊藤 賛成していたら、対抗できないでしょう。

所澤 でも、あの反対では票が集まらないですね。あの反対の仕方を見たら、岡田党首が話しているのを聞いたら、たぶん多くの方は失望して、票を入れることはできないという感じでしたね。党首対談などでは、完全に呑まれているような感じでした。対抗政党は、政権党と必ず違うことを主張しなければいけないという観念があって、それが自民党の強さを生み出している感じがするんですね。いまの様子を見ると、特にそう思います。

伊藤 何と言っていいのかよくわからないけれども、北岡氏はやはり二大政党論なんですね。それで、二大政党の中で本当にリーダーシップをもって、きちんと国家を考えて、憲法改正をやる。それは小泉ではなくて小沢だ、と考えた。そう考えたことと、いま小沢がやっていることとはちょっと違う。北岡氏の本を読んでいると、小沢に対する期待の分だけちょっと変なんだね。

武田 2003年10月号の『中央公論』で、民主党と自由党が合同するときに、1925年の政友会と革新クラブの合同を思い出した人は少なくないだろうと書かれていました。犬養[毅]に触れて、そのあと犬養は半分引退するような形になるんだけど、そのあとで総理大臣になる。小沢と犬養と重ねているところがたぶんあるのだろうという気がしますが。

伊藤 なるほど。小沢は殺されなきゃいけないのか(笑い)。

武田 「話せばわかる」といって（笑い）。僕はどうして北岡先生がこんなに小沢の肩を持つのか、いまひとつわからないところがあります。準備のために読んでいたら、小沢が『日本改造計画』に書いていることに、北岡さんはかなり賛成しているというか共感しているところがあって、やはり壊さないと新しいリーダーシップは生まれません。それはもしかすると、国際環境の変化に対応したリーダーシップだというイメージがあると思うんですね。そういうことはここで少し感じたことは感じたんですが。

伊藤 いま国民が小沢に感じたようなことを、そのとき北岡氏は小沢に感じた。ちょっと人が違っているけど、そうなんだ。北岡氏は「自分の目の黒いうちに必ず憲法改正は実現させる」と言っていた。たしか僕が定年になったときに、僕の家でパーティで大演説をぶって、「必ずやるぞ」と言っていた。それをかなり小沢に託していたことはわかる。でも、どうだろうね、数日後に民主党の党首の選挙をするでしょう。そのときに候補になっているのは、小沢とか菅〔直人〕だ。今の段階で、北岡さんはどうしますか。聞いてみたらどうだ。

武田 僕は聞けないので、伊藤先生に聞いていただかないと（笑い）。

伊藤 ちょっと聞いてみたい。

今井 私は元民主党の中にいたことがあるものですが申し上げますが、先ほど民主党はほとんど反小沢になっていると言われましたが、それは違います。特に鳩山由紀夫さんが党首になっていた頃、菅直人さんなどから「小沢に近過ぎるから、小沢さんからもっと離れろ」という話がよく出ていました。小沢一郎さんが民主党に入る前の話です。それから、年金やその辺のところの考え方自身は、是是非非で行こうという気はあるんです。いまはどうか知りませんが、私はすべて反小沢だとは思わないんです。私は民主党ができてからの経緯の中で、民主党の中にいた時期があり、民主党大会などに出ていてそう感じました。

伊藤 だから、こんど党首の候補に鳩山は上がってこないんですよ。鳩山が党首になったのでは、小沢と手を握られてしまう。そうしたら、いまの自民党よりもっと大きな政党になる可能性があるでしょう。

武田 あまり巨大な政党になると政党が割れることが仮にあるとすれば、それも一つの方法ではあると思いますね。

伊藤 そうそう。いま何故それが可能かといったら、政党交付金があるからですね。やろうと思えばできる。

武田 民主党に頑張ってもらって、また次の選挙で少し大きくしてもらわないと、政界は面白くないですね。日本人というのは政権交代にあまり慣れていない、自民党みたいな大きなものがドーンといて、それが権力を持っている形にすごく慣れているのではないかと、佐藤先生が政策研究院にいた頃に何かの研究会で言っていたのを覚えているんです。先ほど小宮さんがおっしゃった自民党は云々という話をした頃だったのかもしれませんが。でも、やっぱり政権交代があったほうが、ダイナミックで面白いんじゃないかと思います。

伊藤 戦前でも、政友・民政で競い合って劇場型にやっていたわけですよ。その劇場型を一番発揮できたのが、浜口内閣のときと犬養内閣のときで、これは要するにガーッと動いたわけでしょう。その前は少しずつしか動いていないのに、あのときだけものすごく動いた。二大政党は駄目ということではないと思いますが、どうでしょうか、戦後史を考えてみて、二大政党はできるのか。いつも可能性が生まれているだけ。1½政党、細川内閣のときの八党派連合、それから新進党、いまの民主党、どれも遂にとって代われない。

武田 鳩山一郎は戦後、保守合同に反対で、政党は三つあればいいんだ、複数政党制でいいんだと言っていました。それも僕の頭の中に一つあって、そのうちの二つがくっつけばいいんだという非常に楽観的な見方ですが、一つの考えではあると思います。もちろんそこにはいろいろなマヌーバリングが出てくるし、大きさの違いによっては、いまの公明党みたいなピボット、要になるような政党は必ず出てくるとは思います。いまの政局だと公明党は別にどうしても必要という訳ではない（笑い）。これからどのようにしていくかはまた問題ですが、新聞の調査によれば、公明党と選挙協力していく考えがすごく強いということですね。

伊藤 それはそうなんだ。だけど、選挙協力があってこうなったというだけで説明はできないんだね。公明党に対して自民党は応援した。応援したにもかかわらず[公明党は]減った。この解釈ができない。応援しなかったのか。それはないんじゃないか、と僕は思いますけれどね。だってこんなに勝つと思っていないんだから。それは連立の相手に対して相当助力したと思う。山崎拓は「比例ブロックは公明党に」と言ってやったんでしょう。

長谷 現実的には、そう言われてもね。例えば東京12区、太田[昭宏]さんが出たところには自民党の候補がない。[自民党の]選択肢がなければまだしも、例えば「比例に」と言われても躊躇がありますね。実際に比例では、自民党に今回は拍手を送りたいと思って、ずっと支持だったという人に、こちらはやめて公明党にということは、実際には気持ちとしてもやれないという気がするんですけどね。

武田 でも理想型でいうと、そこまでいかなければいけないんでしょうかね。

伊藤 いや、もしそれほどやったら、一つの政党になってしまうでしょう。

武田 今回は落下傘候補があって、それを政党の地方支部が支えるのがイギリス型であるということですね。日本の地方は、基本的にはそれを受け入れましたが、まだすっきり行っていないですね。かなりしこりも残るだろうし、これから落下傘法で当選した人は大変だろうと思うんです。だから今回の大勝は、新しい選挙制度での初の大勝であって、このあとかなり面白いというか、ずっと見ていかないとまぐ評価できないことだろうと思います。

伊藤 今度の選挙の場合、勝ち過ぎたから、思わぬ人が当選したでしょう。比例で尻尾のほうにくっついていて、並べていただけだったのに当選した（**武田** 党の事務局次長

が当選したとか)。それでも東京ブロックでは足りなかった。それで社民党に1議席譲った(笑い)。逆をいえば、この前の選挙では、都市部は民主党にバナーと取られたわけでしょう。あれは本当にきれいなぐらいだった。それがまた今度、きれいに完全にひっくり返った。これが小選挙区選挙だと思う。しかし両方に強いリーダーもいないし、政策もはっきりしないといったら、別に小選挙区だからどうなるというものでもないと思はれますよ。それがああいう小泉というキャラクターと結びついたからこういう現象になった。この前の衆議院選挙は、菅[が民主党の党首]のときで、東京の小選挙区がバナーと民主党になった。ということはやはり菅に対する期待があったんだな。

武田 今回の選挙で、民主党は選挙前に小沢が「今回の選挙は駄目だ」とか、菅が「重傷になったらどうする」とか言っていましたね。ああいうことを見ていると厳しい感じはしますね。そういうことを言うこと自体が、岡田をひきずり下ろそうとしているということではないかという気がしないでもない。

伊藤 それはそうでしょう。

■内閣・政党・官僚

村井 いま、政党とか派閥の話だったんですが、ちょっと違ったところで最近はやっているのが「官邸主導」か「与党主導」か、という話です。これを歴史的な流れの中でどう捉えるのか、何かお考えがありますか。あるいは、戦後直後には、升味先生が言ったような「官僚派」と「党人派」の対立があって、それがどんどん消えていく。最初のほうに武田さんが議院内閣制に触れられましたが、与党があって、官僚機構があって、その媒介に内閣あるいは官邸がある。しかしこういった関係性については、石川さんの本も北岡さんの本も、基本的には派閥と選挙の話ですから触れていない。しかしこれは一つ大きなものだと思います。例えば吉田茂の時代は、占領軍が背景にいたとはいえ「官邸主導」であって、その吉田的なものを、与党ないしは田中的なるものが崩していくという歴史的背景がありました。その田中政治をぶっ壊すんだと言っている小泉さんの手法は、なんとなく吉田の1949年の選挙に似ている部分が多少あります。あのときに吉田チルドレンを大量につくったということもありました。

最近、例えば学習院の野中[尚人]先生が施政中枢論を輸入してきました。つまり、政官関係だの何だのと言っているけれども、日本の戦後政治研究が行き詰まっているのは、上位レベルと下位レベルを混同しているからだという議論があります。例えば上位レベルは閣議・次官会議、あるいは伊藤先生が先ほどおっしゃったようなブレンをどのぐらい使うかというレベルの問題で、下位レベルは、そもそも官庁の中の課長・係長クラスが自民党の政調会とくっついてしまうところです。この両者を混同しているから政官関係が回らなくなっている。うまく言えないんですが、官邸と与党、あるいは一番中央で政策決定を行なって権力を握っているのはどちらなのか、という変遷が戦後史の中にあって、それは派閥の力学だけでは捉えられない。官僚制、内閣制の問題にも絡んでくるものがあります。その点は、石川さんと北岡さんの本では、いまひとつよくわからない点です。北岡さんは『自民党』という本なのでそれもわかるんですが、石川さん

は社会党中心になっている。どうも官僚制、内閣あるいは首相のリーダーシップの問題が戦後政治史に欠落しているような印象があって、この点、曖昧な質問でたいへん申しわけないんですが、どうお考えになりますか。

武田 本当にその通りだと思います。でも、政治史のほうでも、ポイントポイントで、少しずついまのような論点について考察が出ていないわけではないと思います。例えば与党の事前審査制度も、90年代の流れの中で出てきたんじゃないですか。官僚と議会や政党との関係は、少しずついま注目されていると思います。例えば牧原〔出〕さんの本〔『内閣政治と「大蔵省支配」—政治主導の条件』（中央公論新社、2003年）〕は、たぶんその一つですね。あれは大蔵省に限ったといえ、限ったのかもしれませんが。例えば政府・与党会議はいったいつぐらいからやられるようになったのかは、前にちょっと調べたことがあったんですが、よくわからないところだったんですね。鳩山・民主党のときに与党と政府が話し合う定期的な連絡会議ができるというのを、新聞記事か何かで読んだ記憶はあることはあるんですね。ただ、何故なのか、そしてそれがそのあとどうなったのかはまだわかっていないと思います。

そもそも議院内閣制というけれども、議院内閣制を日本人がはたしていつ頃理解できるようになったのか。例えば新憲法の貴族院の審議録を見ると、北吟吉などは、「政党に政治の実権を渡したら、戦前と一緒に政党の横暴になってしまう。ちょっと政党が強過ぎるんじゃないか」という警戒心を持っています。でも、議院内閣制は、多数をとった政党が行政権を握る制度ですね。サルトーリなどの話も共有するわけで、バランスをとってくるわけですね。日本人は最初の頃、そういうイメージがほとんど湧かないでやっていた。もちろんわかっている人はたくさんいたと思うんですが、政治家がはたしてどれだけそれをわかっていたのか。そういう歴史も調べてみると面白いかもしれませんね。

村井 後藤基夫さんという朝日新聞の記者は、特に戦時から占領期ぐらいにかけての非常に鋭い分析をなさる方ですが、とにかく吉田のつくった体制があまりにも強力で、官僚制と財界を押さえたので、河野と鳩山は手も足も出ない。これをどう崩していくかが非常に大きかったと思う、という話がありました。簡単なように聞こえて、結構深い話だと思うんです。それを鳩山・河野が崩し切れなかった。そのうちの一つで私が興味があるのが、河野が繰り返し「主計局の内閣移管」とか「経済企画庁の強化論」、あるいは「行政管理庁と経済企画庁の合体論」を打ち出すんですね。つまり吉田に大蔵省主計局を押さえられている意識が非常に強いんですね。その火が消えていくのが60年代ぐらいなんだろう。そういうことがほとんど聞かれなくなって、第一次臨調でもすり減ってしまう。ちょうどその頃、田中が違った方向で吉田的なものを崩していったのかな、となんとなく思います。

今回何を聞きたかったかといいますと、長い歴史の中で、牧原さんも試みっていますが、戦後政治を官僚制も含めてどう捉えていくかというのが、あまり確立されていないような印象があるんです。例えば、先ほど出た政府・与党連絡会議という話ですが、少なく

とも占領期中は私が見た限りではないですね。なんとなくそういうことがあって、それを党人派がどう崩していくか。田中と鳩山は世代が違うんだけど、どのようなアプローチをそれぞれしたかわかりませんが、そこはうまく割り切れないかなと思っているんです。質問にはなりませんでしたが。

伊藤 いまの政策決定のプロセスの話は、ここ〔石川、北岡の本〕にはほとんど出てこないじゃないですか。すっぱり抜けている部分ですね。北岡氏は部分的には触れていると思いますが。だから例えば「官邸」と言った場合に、どういう定義なのか。いまの官邸には、例えば国土交通省の連中など〔官僚〕がいっぱい入っているわけでしょう。これは誰に対して忠誠を尽くしているのかよくわからない。

■今後の課題、インタビューの対象など

伊藤 岡本薫さんという『著作権の考え方』（岩波新書、2003年）を書いた人がいますが、彼は〔文部省〕研究助成課長だったので時々行って話をしていました。「小泉になってから政治のやり方は根本的に変わった」と彼は言っている。僕にそれを話すから、「書いてくれ」と言ったんです。すごく面白いんです。「書こう」とは言っていたけども、その後本が出た話を聞かないですね。だから、小泉になってからかなり変わったことは確かだろうと思うんですが、その前に「官邸の強化」という路線は布かれていたでしょう。橋本〔龍太郎〕の行政改革でも、それがかなり大きなテーマでしたね。だけど、それは実際に運用する人によって違う。そもそも本当に小泉はそれを運用しているのか、それとも全くそれとは関係なく物事が動いているのか、それもよくわからない。

それから「党主導」という言い方もありますね。「党主導」と「官邸主導」とがぶつかっている。政調会を通らないと何事も駄目と言いながら、今度〔の郵政民営化法案〕は政調会を無視したでしょう。あれは、戦後自民党が築いてきた政党としての機能、与党としての機能をぶっ壊したというか、機能不全にさせたと思います。すべてについてそうだとは思いませんけれどね。だけど非常にシンボリックに言えば、道路公団〔民営化〕にしても、譲歩はしたけれど押し切ったわけでしょう。今度〔郵政民営化〕は全く関係なしにやった。そうすると、「官邸」とはいったい何かということがよくわからなくなる。

武田 仕組みとしては、いろいろな法律を変えたりはしたけれども、実態としてどうなのかということとは、『官邸外交——政治リーダーシップの行方』（朝日新聞社、2004年）という本に載っていますね。基本的にインタビューで書いた本です。こちらでもインタビューすればいいんですけど。

伊藤 やりたいですね。匿名でいいですよ。

武田 インタビューした人の中で、「俺が言ったことを匿名にしてくれれば何でも話す」と言う人がいるんですね。そうすると、ジャーナリズムと同じですね。先ほど触れませんでしたけど、大塚清二の『経世会 死闘の70日』（講談社、1995年）という本があります。経世会のことには触れているので、ちょっと読んでみたんです。大家というのはペンネームなんですね。誰だかわからないんですが、金丸〔信〕と小沢と梶山〔静六〕の

関係を見たかのように書いていて（笑い）、最高の本だと思うんですが、はたしてこれを信じていいものかどうかよくわからないんです。新聞記者か通信社か何かの社員だと思うんですが、「最終的にはペンネームにしました」という感じで書いています。

伊藤 自分は歴史研究者なんだけれど、現実には非常に近いところは、やっぱり匿名のオーラルヒストリーで捕まえる以外ないと思いますね。

武田 新しいところになればなるほど、歴史家よりジャーナリストのほうが、よほど情報を知っていて、そういうジャーナリストが書いたものを、こちらは導きに利用するしかないというところがありますね。

伊藤 たぶん僕らがインタビューをやろうと思ったら、ジャーナリストとガチッとぶつかるでしょうね。

武田 そうですね。新聞社の政治部がやった特集で、すごくいいものがたくさんありますね。それは必ずしもリストアップされていないと思うので、やってみても面白いと思いますね。

伊藤 そうですね。僕がいまのさまざまな事象を自分なりに理解していくために何を使っているかといったら、雑誌の『選択』です。記事は全部匿名です。もちろん全面的に信じているわけではないけれど、かなり貴重な情報源にしています。

今度の自民党の馬鹿みたいな勝利があつて、それで自民党を見ると、ちょっといままでと違って見えるのではないか。同じ自民党なので、同じところはもちろんあるだろう。でもストーリーとしては、どこかにターニング・ポイントをつくらないと面白くないというか、見えないというか。いつからどういうふうにも崩れかかったのか。小泉のやり方は自民党ではないのか。自民党は小泉が「ぶっ壊す」と言っていて、本当にぶっ壊れて小泉党になったのかどうか知らないけれど、でも自民党だ。すごいインパクトがありますね。だから現代史というのは面白いというか、危ないというか。どうしても、「本来こうあるべきだ」という気持ちが全くないことはあり得ないじゃないですか。長期的に革新政党が勝利していくという期待と希望を持つか、二大政党に賭けるか。そして、その二大政党のうちの一つは本当にリーダーシップを持ったリーダーで、小沢であつてもいいんだけど、憲法改正の道に行くのか。

武田 もう一つ、今度の選挙の前までは、連立時代が続くという選択肢もあつたと思うんですね。二大政党なり自民党の優勢なり、そういうものしか知らない状態から見ると、連立政治は非常に危ういというか不安定に見えるけれど、世界的に見ると二大政党制のほうが少ないわけで、連立制が当たり前なんです。これが日本の一つの形なんだという議論も、今度の選挙の前まではまだ何となく通用しそうだったんですけど、今回大勝してしまったので、全然通用しなくなってしまった感じがするんですね。ただ、しばらく経ったら、またわからないですね。少なくとも自民党以外の政党が政権を一回とってみないと、どういうふうになるのか、思考実験だけではなかなかうまくいかないところがある。実際に起こってみないとわからないという感じがします。でも、そうなったら日本は大変なことになるかもしれませんね。

伊藤 北岡君のこの本でちょっと矛盾があるのは、自民党の定義みたいなことをやっていることですね。保守本流が中心になっているのが自民党ですね。保守本流の定義があって、それが日米関係ですか。

武田 「日米協調路線の維持強化」と書いてあります。

伊藤 そうなんですね。維持強化の強化とまではわからないけれど、村山内閣もそう言ったんだよ。保守本流といっても、例えば鳩山由紀夫だって日米関係中心でしょう。本当に自民党の保守本流をそういうふうに定義していいのかなと思いますね。

武田 北岡さんのイメージでいえば、旧吉田派と岸派の合流なんですね。この二つがくっつくと、佐藤もくっつくということですから、非常に都合のいい図式であって、説明しやすい。

伊藤 佐藤、池田、岸で、岸のあとは福田だから、そこまで入る。いま、その福田の後裔が二代やっている。

どうでしょうか、7時半になりました。この前、佐道〔明広〕君に頼んだ戦後の防衛問題、安全保障問題は、戦前と一番違うところなんですね。戦後史を考える場合はそれをちゃんとやらなければ駄目だと思います。結局、安保は日本の安全保障の要です。これを戦後史の中できちんと位置づける。佐道君には次回お願いしますとっておりますが、今日はいないのかな。彼は了解しているはずです。皆さんのところに佐道君から何かメッセージが入りましたか。武田君のところに何か来ていましたか。沖縄問題とか何か短い文章なんだけれど、それがどういう意味なのか僕はよくわからなかった。この次は佐道君に頼んで防衛問題をやってもらおうと思います。何かほかにご意見はあるでしょうか。

今井 きのう、元国会議員の政策秘書をしていた人と話していたら、今回の自民党の大勝で当分選挙はないだろうと言っていました。武田さんの最後の資料のグラフで、統計をとってみても、60%のシェアを取ったときは、平均するとやっぱり長いですね。次の選挙は当分4年ぎりぎりまでになるんですか、いままでの例では、3年ですね。

武田 4年はないですね。

今井 3年が多いですね。

武田 小泉が辞めたら、そこで一度やりますかね。やらないと格好悪いですね。

伊藤 どうするんでしょうね。やらないと格好悪いけれど、必ず減るから。

今井 やらないほうがいい。だって3分の2ぐらい取っているんだから。

武田 今度の選挙も「やらない、やらない」と言って結局やりましたので。

伊藤 でも、やったら必ず減ることはわかっているんだよ。

今井 これだけの数は、次はもう取れないでしょう。

伊藤 これ以上取ったら大変だ。閣僚の配分だって大変だからね。たくさんポストをつくって配分しなければならない。

今度は、歴史になった社会党もやっぱり一度やらなければならないね。だからこのメンバーでない人で社会党をやっている人に、一度話をしてもらおうのはどうだろうね。

武田 歴史としてやっている方を少し探してみたんですが、なんとなくいないような、いるような。森裕城さんという同志社大学法学部の政治学の方が『日本社会党の研究 ― 線転換の政治過程』（木鐸社、2001年）を書いています。社会党の路線の政治過程みたいな話でわりに読みやすい。山口二郎さんと石川さんが編纂された社会党の研究は論文集も読んでみたんですが、歴史としてはちょっと読みづらいですね。あとは原彬久さんの『戦後史のなかの日本社会党』（中央公論新社、2000年）でしたか。

伊藤 それじゃあ原さんに頼もうか。

武田 今回はあまり触れませんでした。河上民雄さんが書いているものとはちょっと違って面白いですね。原さんの本はヒアリングだけではないんですけど、ヒアリング中心にして書いたことの面白さがあります。もしかしたら危ないところもあるのかもしれないんですが。よくわからないところもあるので、専門家に話をしてもらえると勉強になると思います。

伊藤 それは、その次の企画として考えてみます。

武田 大原社研に五十嵐仁さんという方がいますが、組合との関係で本を書かれていますね。

伊藤 組合だと生産性問題がやっぱり関係深いんだよ。これは梅崎〔修〕君に話をしてもらわないと。彼は労使関係と生産性と両方にらんでやっているから。自民党の問題はこれからまだまだやらなければいけないけれど、さっき小宮君が言ったみたいに、まだ佐藤〔誠三郎〕と松崎哲久のあれなんかもう一度読み直してみる必要があるし。小宮君にそれをやってもらってもいいし、おいおい考えましょう。

武田 松崎〔哲久〕さんは、今回の選挙ではどうだったんですか。

伊藤 落ちたんじゃないか。

武田 じゃあ、呼びましょう。

伊藤 呼びましょう（笑い）。

武田 大東の東松山キャンパスのあたりが選挙区でしたよ、埼玉10区。

伊藤 そうだ、あの辺が選挙区だ。それでは武田君、ご苦労さまでした。しかし本当にたまたま〔選挙と〕ぶつかった。想定外の事態でありました。

〈以上〉